

詩編 117 編

祝福の道

○ 本日の、詩編 117 編の講解説教をいたします。 117 編は、詩編全体の冒頭にあり、

詩編全体の序言的の意味を持っています。

詩編は、イスラエル民族の歴史と信仰の生き姿を現実から生み出されたもので、

その中には、神に対する讃美・感謝と共に、罪の告白、懺悔があり、また不平不満、叫びがあります。 それを、お祈りの時代を通じて共感を呼び、愛誦されてきました。

詩編 117 編は、その序言であり、信仰と生活に関する根本的の存在方を示しています。 ここには、まず「いかに幸いなることか」と、〈祝福の道〉を教えています。

1:1 いかに幸いなることか。 神に逆らう者の計らいに従って歩まず、

罪ある者の道にとどまらず、 傲慢な者と共に座らず、

1 節の冒頭にある言葉「いかに幸いなることか」は、注目すべき言葉です。 主としてこの説教

(29153-10) を思い起こします。 幸いなること、心の實しき者、天国はその人のものなり、と、神によって約束され、かつ、すでにそのに実現している幸いです。

「神に逆らう者」は、口語訳では「悪しき者」と訳されています。「悪しき者」は、道徳的の善悪を考へます。 「神に逆らう者」は、神への服従か不服従か、神との関わりを問うていることか、けりてきます。

「神に逆らう者の計らう」とは、どういうことでしょうか。 イスラエル人の信仰によれば、神を信じ、神に従うことが善であり、義であって、その反対は、すべて悪であり、罪であるのです。

「罪ある者の道」とは何ぞ(どうか)。 人々(群衆)は、同じ場所を往復していき、それが踏み固められて一つの道となり、その「道」は習慣として定着するものなり。

「傲慢な者」は、不遜な態度(謙遜でない)、神に対する嘲りです。

この「神に逆らう者」、「罪ある者」、「傲慢な者」は、皆、神を無視し、生きた人々を指している。

次に、その状態は「歩まず」、「とどまらず」、「座らず」の三つの動詞に注目して、この人々の行動を示しています。 主の御旨に従って生きる者の姿を、実に正確に、鮮明に描き出している言葉です。 そのように歩む者の姿は、詩人の祝福であること、お祈りの時代です。「いかに幸いなることか」

神に造られる人々の、神の祝福に与ること、この真の幸いなること、

